バクーニンとネチャーエフ

——『革命家の教理問答書』をめぐる——

左 近 毅

短期間とはいえ、1869年3月から1870年7月に至る M. A. バクーニンと C. F. ネチャーエフとの協力関係は、19世紀の60年代から70年代に及ぶロシア革命運動の中で興味ぶかい場面を構成している。そして両者の出会いは、単なる一場のエピソードと言うにはあまりに大きな影響を、当時のロシア、ひいてはヨーロッパ革命運動にもたらしたのであった。それにもかかわらず、老革命家と若きファナティックとの交渉の経緯については、今日に至るもなお判然としない面が多く、したがってそれらを一つ一つ解き明かそうとする努力の過程で、歴史家の間に幾多の論争がくりかえされてきた。本稿は、無署名の『革命家の教理問答書』はいったい誰によって書かれたのかという、バクーニンとネチャーエフをめぐる論争点の一つを取り上げ、これに若干の照明を試みたものである。

1869年3月から8月にかけて、つまりネチャーエフがジュネーヴに現われてからロシアへ帰国するまでに、バクーニンとネチャーエフの手によっていくつかのビラ、パンフレット、論文が次々に草された。どういうわけかこれらのうちの一部は署名がきちんとしており、⁽¹⁾その他は無署名のままであった。無署名のまま出されたのは、パンフレット『革命のはじめ』、⁽²⁾『革命問題の提起』⁽³⁾そして『革命家の教理問答書』⁽⁴⁾である。

『革命家の教理問答書』⁽⁵⁾（以下『カテキズム』と略記）の著者の問題についてはしばらく措くとして、それが公開されるまでの経過を少したどっておこう。この「革命家の綱領」⁽⁶⁾の原文はローマ字を用いた暗号で書かれ、ネチャーエフは解説書と共にこれをロシアへ持ち帰った。しかしこの文書をネチャーエフは大部分の革命運動参加者に見せず、秘匿しておいたらしい。⁽⁷⁾ところが1869年11月26日（12月8日）、ネチャーエフ・グループの一人である J. ウスペンスキー宅の家宅捜索に際して、『カテキズム』は押収の憂きめを見、解説書も

数日を経て同じメンバーであったA. クズネツォーフの手元で発見された。⁽⁸⁾ ロシア政府は解読後これをネチャーエフ事件の法廷席上で開陳、ついで1871年7月9日(21日)付第162号の『官報』に掲載した。⁽⁹⁾

その反響はきわめて大きく、「ネチャーエフ主義」に対する悪評は内外に急速に高まった。⁽¹⁰⁾ わけても、ロシア革命運動の内部にもたらした『カテキズム』の衝撃はただならぬものがあった。⁽¹¹⁾ その立場のいかんを問わず、『カテキズム』の内容⁽¹²⁾ を肯定的に評価する者は殆んどいなかった。⁽¹³⁾ あるいは、周囲の状況から肯定的に評価することはおよそ不可能であったと言ってよい。今日でも事情は変わらない。⁽¹⁴⁾ ネチャーエフ主義⁽¹⁵⁾ を最も極端に表わしている『カテキズム』⁽¹⁶⁾ は、こうして無署名であったがゆえに、加えて当事者たちの沈黙あるいはあいまいな発言⁽¹⁷⁾ のゆえに、いったい誰が書いたのかということが、公表直後から問題となった。この問題に最初の一石を投じたのは、B. Д. スパソヴィチであった。⁽¹⁸⁾ その主張は弁護上の都合から発したきらいがあり、正確なデータに基いた判断とは言い難い。⁽¹⁹⁾ これを皮切りに、自来『カテキズム』の著者をめぐって、同書に現われている「革命的マキアベリズム」の指弾を前提として、バクーニンをネチャーエフと同罪視する立場あるいは免罪する立場、アナキズムの立場⁽²⁰⁾ あるいはマルクス主義の立場、⁽²¹⁾ レーニン主義の立場⁽²²⁾ などから、ときに党派性を帯びた激しい論議がかわされてきた。論争は未だに継続されているが、1966年⁽²³⁾ を境に問題は新しい段階に入った。⁽²⁴⁾

まず1966年までの論争における主要な特徴を摘記しておこう。解釈は、これまでおおよそ三つの方向に分類することができる。当然ながら、バクーニン説⁽²⁵⁾ とネチャーエフ説、⁽²⁶⁾ それに共著説⁽²⁷⁾ である。これまで比較的有力だったのはバクーニン説で、その論拠は必ずしも一様ではないが主要点を概括して挙げると、1) 内容、形式、文体がバクーニンのそれまでの著作に類似していること(ドラゴマーノフ、カー、ステクロフ、コジミン)、2) サージン(ロス)の証言が存在すること(レーヴィン)、3) ネチャーエフに否定的な発言のあること(ウスペンスカヤ)、4) バクーニンが否定の発言をしていないこと(マルクス、エンゲルス)、5) スパソヴィチの断定が存在すること(ドラゴマーノフ、ステクロフ)などである。これらの論拠のうち、比較的有力視されてきたのは1) および2) である。次に、ネチャーエフ説を採る者の論拠は必ずしも十分ではなく、チェルケゾフもアントーノフも殆んど論証らしきものを示していない。ガンバーロフは、『カテキズム』の類を執筆する構想が、すでにロシアでネチャーエフの内部に生まれていたという見解を提示している。

共著説については後述するとして、問題の新展開がどのようにして生じたかに筆をすすめよう。

既に触れたように、1966年発掘された1870年6月2日付ネチャーエフ宛のバクーニンの手紙⁽³⁸⁾を根拠⁽³⁹⁾に、コンフィーノは、「十分断定的とは言えないまでも、⁽⁴⁰⁾ さらに新しい資料が発見されるまでは、バクーニンが『カテキズム』の著者であると考えすることはできないし、それを発案し、書いたのがネチャーエフだと考えさせる多くの因子が存在する」⁽⁴¹⁾として、論争に新たな波紋を投げかけたのであった。このネチャーエフ執筆説は、急速に定着しつつあるように思われる。⁽⁴²⁾ 新資料にいち早く反応したのはソ連のピルーモヴァ女史である。女史は、コンフィーノの新資料発表とちょうど前後して刊行した旧著『バクーニン伝』では共著説を公けにしていたが、⁽⁴³⁾ 新資料の発見を高く評価し、⁽⁴⁴⁾ 独自の資料をも加えて、自説を改め、『カテキズム』を書いたのはネチャーエフとしたのであった。⁽⁴⁵⁾ このバクーニンの書簡が存在するらしいということはじつは早くから、C. セレーブレンニコフの論稿から知られ、⁽⁴⁶⁾ ステクロフによって発見の呼びかけが為されていたものであった。⁽⁴⁷⁾ ピルーモヴァ論文の公刊は、ソ連国内に賛否の大きな反響をもたらしている。つまり新段階の論争は、ネチャーエフ執筆説に大きく転回しながらも、なおそれを異とする動きがある。以上の論争の現状を踏まえて、この問題に関する筆者の所見を述べたい。

6月2日付のバクーニンの書簡によって、『カテキズム』の著者をはっきりネチャーエフと断定できるであろうか？ それに答える前に、A. スミルノフの最近の論文を紹介しよう。「バクーニンによって書かれた著名なアナキズムの『教理問答書』、その著者をネチャーエフとするような単純化は、史的事実にもとるものである……コンフィーノが公開したバクーニンの手紙は、アナキズムの理論家を正当化するものではない……これでバクーニンの思想を再評価する論拠が生まれたとは言えない……ピルーモヴァは、革命倫理の面から見て好ましからぬバクーニンの行動を無罪放免にしようとしている…」。⁽⁴⁸⁾ C. H. カーネフもこの主張にまったく賛成であるとして、新発見の手紙にもかかわらず、バクーニン自身が政敵⁽⁴⁹⁾ に対してジェズイットばりの、革命家に応わしからぬ陰險な闘争手段を用いたのではないかと指摘する。⁽⁵⁰⁾ 両者に共通しているのは、史的事実に対する細心の配慮が欠けていることと、バクーニンを『カテキズム』から引離す⁽⁵¹⁾ ことによって生ずるイデオロギー効果への懸念である。さて最初の設問に戻って答えるなら、上記のソ連の論者とは別な角度から、断定は困難と言わざるを得ない。ピルーモヴァは別にして、⁽⁵²⁾ コンフィー

ノもレーニンも、さらにこれらを支持すもバリュエも、慎重に断定を避けて、ネチャーエフが著者であると考えてもよいとしている。ピルーモヴァは、ネチャーエフ説を裏付けるもう一つのデータとして Г.П. エニシエルロフを援用している。エニシエルロフは貴族出身のペテルブルク工科大学自由聴講生で、1868—69年当時学生運動に投じ、ネチャーエフ事件にも連座した。ある集会で、彼が提案した陰謀、軍事クーデター、ありとあらゆる暗殺、ジェズイット式のやり方をめぐって議論が沸き、その時握手を求めて全面的に賛成したのがネチャーエフだったと言う。⁽⁴³⁾ そこに示された原初的綱領が、後年ネチャーエフにとって『カテキズム』の原型になった、⁽⁴⁴⁾ と推論することもできよう。たしかに、ネチャーエフが国外に出る以前に属していたサークルでは、革命家の行動規範となるべき一種の『カテキズム』をつくる構想が生まれていた。⁽⁴⁵⁾ したがって、この文書の草稿がネチャーエフのスイス訪問に際してすでに囊中にあった⁽⁴⁶⁾ とは言わないまでも、その原案らしきものがロシアから持込まれ、ロシア国内の状況にうとかったバクーニンとしては、ネチャーエフの口頭の説明によって、その構想の現実化につよい関心を抱いたことは十分想像される場所である。ピルーモヴァがここに附加した新資料は『ネチャーエフ宛の手紙』に併せて、たしかに『カテキズム』のネチャーエフ執筆説をいっそう補強する論拠となっている。

加えてわれわれは以前から Б.П. コジミンの所説を知っている。⁽⁴⁷⁾ トゥカチョーフ、ネチャーエフ、ラリー、ニキーフォロフ、アメチストフ兄弟らのサークルにはのちに法廷で『革命行動の綱領』と呼ばれた綱領があった。⁽⁴⁸⁾ この綱領をだれが作成したのかについては、トゥカチョーフとネチャーエフの共作説（スチェクロフ、コジミン、ピルーモヴァ）、ネチャーエフ単独説⁽⁴⁹⁾ があるが、ここでは深入りしないことにして、少なくともネチャーエフがこれに関わり、この文書を承認していたことだけはまちがいない。⁽⁵⁰⁾ 革命のあるべき姿を説いたこの『革命行動の綱領』には革命を加速するために、革命型の人間を育成する必要が説かれているが、これは『カテキズム』の第1部、第2部⁽⁵¹⁾ に結実した⁽⁵²⁾ とまでは実証できないにしても、両者のアナロジーには注目してよい。⁽⁵³⁾

ともあれ、ピルーモヴァは以上の二つの新資料を手掛りに、『カテキズム』の執筆をめぐる問題に断を下した。断定は不可能にしても、ネチャーエフ執筆説がきわめて有力になった点は認めたい。ただ著者を確定する問題は微妙であり、例え署名のあるばあいでも第三者の関与を絶対に排除するわけではない。筆者は最近の諸説を通して、次のように推定している。ネチャーエフはロシア

の学生運動の中でトゥカチョーフ、エニシェールロフらに接し、革命家の行動綱領をすでに独自に構想しはじめ、他方『人民の事業』のバクーニン論文などを介して彼を知り、国外との連携というグループの方針もあって、バクーニンへの接近を企図していた。ジュネーヴにやって来た時に、ネチャーエフが『カテキズム』の草稿を携えていたかどうかは判然としないが、少なくとも基本構想は彼の中にできあがっていた。これを骨子として、実際に筆をとり成文化をしたのはバクーニンだったかもしれない。そして、最後の「結社の人民に対する態度」を加筆した。こうして完成した『カテキズム』は共著と言うべきかもしれないが、それにしても主役を果たしたのはあくまでもネチャーエフである。このように考えると、同時代の人々の証言や研究者の多くの発言とつじつまが合うのである。これまでの共著説は、当然のこととして、論証を省くきらいがあった。⁶⁴ バクーニンが筆を執ったのであれば、彼の文体のくせや特徴的な言い回し⁶⁵の説明がつく。また最終部を加筆したのであれば、バクーニンのそれまでの思想で色濃くその部分が反映していることも、⁶⁶ 納得がゆこう。そして、ネチャーエフがレヴァショーフに宛てた書簡で執筆を否定したととれる箇所も⁶⁷ 『カテキズム』はバクーニンが書いたと、看守を通してネチャーエフが「人民の意志派」に伝えた⁶⁸とする話も、了解が可能である。

バクーニン説の有力な根拠となってきた、サージンの証言はどうか？ バリュエは、この論争の新段階に至っても、サージンの証言の重要性は変わらないとしている。⁶⁹ サージン（ロス）は、ネチャーエフの書類を焼却したことに関連して次のように述べている。「その後バクーニンと個人的に話をした際に、ネチャーエフの書類の中に見つかったあなたがお書きの『カテキズム』をわれわれは焼却してしまったと伝えた。彼はこれをたいしたことではないという風に、まったく気の乗らない様子で聞き流した」。⁷⁰ 彼は口頭でも（1904年ネットラウと会った時、また1921年モスクワ印刷局での会合の時）、『カテキズム』の著者がバクーニンだと話している。⁷¹ バクーニンの友人で、彼の筆跡をおそらく知っていたと思われるサージンの証言は、たしかに歴史学者の間に決定的な重味を持ってきた。⁷² 同時代人の個人的な証言や回想の類は興味ぶかいとは言え、単なる私見にすぎず証拠にならない、⁷³ とするのはサージンに限っては難しかろう。レーニンは、たとえ筆跡がバクーニンのものでも、『カテキズム』の筆者を証明することにはならない⁷⁴ と主張するが、これは裏を返せば少なくとも筆を執ったのがバクーニンであることを認める発言である。なお論証は尽きないが、以上の論点によって、『カテキズム』はネチャーエフが独自に大部分

を構想、発案し、バクーニンが筆を握って全体を彫琢し、最後の部分に自分の主張を書き加えたと考えるのが、最も事実に近いように思われる。最後に、ステュクロフをはじめ、『カテキズム』をアナキズムの綱領とする解釈がきわめて多いが、この性格づけはバクーニンが加筆したと考えられる最終部にしか妥当しない。いずれにしろ、『カテキズム』をめぐるネチャーエフ主義の問題は、単に「専制国家における革命運動の未成熟」⁶⁴とか、「極めて例外的なエピソード」⁶⁵として片づけるには、余りに重大な歴史事実であろう。ネチャーエフ主義そのものについては他稿にゆずらねばならないが、一つだけ附言しておく、バクーニンがネチャーエフに見たのは、革命的エネルギーであり、私心のない、革命への献身であった。このことは、6月2日付ネチャーエフ宛の手紙から痛い程よく伝わってくる。そして、ソ連の史家の間にも、「ネチャーエフの不屈のエネルギー、あらゆる搾取に対する怒り、革命の事業への献身、法廷での堂々たる態度、監獄における多年の艱苦……」を評価する意見⁶⁶が見られ、ネチャーエフのもう一つの面にも、公平な光を投ずる作業が要求されるのである。

注(1) 署名がはっきりと入っているのは、檄文『大学、アカデミー、高専の学生諸君へ』（ネチャーエフの署名）と、檄文『ロシアの若き同胞への数言』（バクーニンの署名）である。なお、『人民制裁団出版物』第1号には「ロシア革命委員会」の署名、『気高きロシアの貴族よ！』には「リュールクの末裔ならびにロシア独立貴族党」の署名が見える。

(2) 《Начало революции》。このパンフレットには日付も入っていないが、8月頃のものと思われる。また著者については、例えば歴大なバクーニン研究を残したソ連の Ю. М. ステュクロフは、これをバクーニンの筆になるとする（Михаил Александрович Бакунин, его жизнь и деятельность, том III, М.-Л., 1927, стр. 445）。同じソ連の史家 Н. М. Пилер-Мовва女史は、ぎゃくに、ネチャーエフが執筆したと主張している（Бакунин, М., 1970, стр. 296—297）。

(3) 《Постановка революционного вопроса》。同じく正確な日付ははっきりしない。この著者に関しては、今日ではバクーニン説にはほぼ落ち着いている。

(4) 《Катехизис революционера》。同じく日付けなし。この『革命家の教理問答書』と、バクーニンがナポリで1865年にまとめあげた『革命の教理問答書』《Революционный катехизис》とを混同してはならない。この混同は、例えば、ソフィア・ペロフスカヤにうかがえる（А. И. Успенская, Воспоминания шестидесятницы, «Былое», 1922, №. 18 を参照）。

(5) 別記のように、『カテキズム』が最初に公表されたのは、1871年の『官報』紙上である。以後次のようなテキストが現われている。М. П. Драгоманов, Письма М. А. Бакунина к А. И. Герцену и Н. П. Огареву, Женева, 1896, стр. 490—

- 498; А. Н. Шилов, «Борьба классов», №. 1—2, Ленинград, 1924, стр. 262—272; Ю. М. Стеклов, указ. соч., т. III, стр. 468—473. など。また外国語版としては, Н. Iswolsky, *La Vie de Bakounine*, Paris, 1930, p. 235—241; Max Nomad, *Apostles of Revolution*, New York, 1961, pp. 230—235; Karl Marx, Friedrich Engels, *Werke*, Bd. 18, Berlin, 1969, S. 426—431; J. Barraué, *Bakounine et Netchaïev, trois études sur Bakounine*, Paris, 1971, pp. 61—66; Michael Confino, *Violence dans la Violence*, Paris, 1973, pp. 97—105 などがある。邦訳のテキストは次のとおり。『マルクス・エンゲルス全集』, 第18巻, 大月書店, 東京, 1967年, 416—420頁。バクーニン著, 藤山順訳『社会革命の綱領』, 菱社, 東京, 1969年, 47—53頁。松田道雄編『ロシア革命』, ドキュメント現代史, 平凡社, 東京, 1972年, 106—113頁。外川・左近編『バクーニン著作集』, 第5巻, 白水社, 東京, 1974年, 401—408頁。
- (6) じつはこの原文にはタイトルが付されていないかった。З. К. Раллер («Былое», 1922, №. 18, стр. 37 и след.) やコンフィーノ (M. Confino, op. cit., pp. 46—47) は、『カテキズム』をこのように別称している。
- (7) Ю. М. Стеклов, указ. соч., т. III, стр. 466.
- (8) A. Lehning(éd.), *Archives Bakounine*, vol. IV, Michel Bakounine et ses relations avec Sergei Nečaev, 1870—1872, Leiden, 1971, p. LX.
- (9) 『カテキズム』が正式の活字となって公けにされたのは, これがはじめてである。ロシア政府は「忌わしい革命文書」を公表することによって, 革命集団の評価を落そうと企図したものと思われる。なおオリジナルは, 1917年革命のさなかに焼失した。
- (10) ロシアの反動新聞はここぞとばかりに革命運動を攻撃し, М. Н. Катуховも《Московские ведомости》の社説でこれを叩いた。『カテキズム』の公開も含め, ネチャーエフ事件の一部始終は西欧各紙にも伝えられ, ロンドンの新聞はインターナショナルとの関係を誇示したネチャーエフの証言を材料に, インターナショナルを激しく糾弾した。総評議会は, ネチャーエフとの一切の関係を否定する緊急声明を出して, これに応えたのであった。
- (11) ネチャーエフの同志であった В. Засурричは, 既成の道徳の枠をはるかに越えていた往時のネチャーエフについて, 次のように嘆じた。「あの人は私たちの世界の, インテリゲンツィアの世界の人間ではなかった。私たちにとって無縁の存在だった。」(Нечаевское дело, «Освобождение труда», №. 2, М., 1924, стр. 69) ウスペンスカヤも, ネチャーエフが『カテキズム』を隠していたのは, こんなに恐ろしい綱領がロシアの革命青年層に受入れられる筈のないことを知っていたためだと述べている («Былое», №. 18, М., 1922 стр. 37 и след.)。
- (12) 『カテキズム』の逐条的な内容の紹介は, 紙面の都合上, 外川継男訳『革命家の教理問答書』(『バクーニン著作集』第5巻所収, 白水社, 東京, 1974年)に譲りたい。
- (13) ネチャーエフを積極的に評価し, これを革命運動の先駆者として位置づける試みが, А. Гамбаровに見られるが, これはむしろ例外に属する (А. Гамбаров, В

- спорах о Нечаеве. К вопросу об исторической реабилитации Нечаева. М.-Л., 1926 を参照)。
- (14) 西欧の研究者にはネチャーエフをレーニン主義の先駆者とする解釈が見られ(例えば、その代表として、Michael Prawdin, *The Unmentionable Nechaev, A Key to Bolshevism*, London, 1961 がある)、これと関連して党派的な立場から、ソ連ではネチャーエフをいっそう激しく批判する動きが出ている(Ю. Ф. Карякин, Е. Г. Плимак, *Нечаевщина и ее современные буржуазные «исследователи»*, «История СССР», №. 6, М., 1960, стр. 172—173 を参照)。
- (15) ネチャーエフ主義を В. Ф. Антонофは、「ネチャーエフが革命層の間に持込んだ背徳、無原則、冒険主義、独裁の精神」と定義している。(Революционное народничество, М., 1965, стр. 88)。
- (16) E. H. Carr, *Michael Bakunin*, New York, 1961, pp. 394—365.
- (17) З. ラリーや М. П. Сержин (Armand Ross) は、バクーニンとの会話の中で、彼が『カテキズム』を書いたことを認めたかのように伝えているが、いずれも単なる印象であって信ぴょう性に乏しい(З. Ралли, *Из моих воспоминаний о М. А. Бакунине*, Исторический сборник «О минувшем», М., 1909, стр. 335—336; М. П. Сажин, *Воспоминания*, М., 1925, стр. 74 を参照)。一方、ネチャーエフには自分の著であることを否定したと取れる発言がある(П. Щеголев, С. Г. Нечаев в Алексеевском равелине, «Красный архив», т. II, М.-Л., 1923, стр. 229)。ただしそれもしごくあいまいで、そのうえネチャーエフの戦術的な発言とも解釈でき、十分な証拠と見なすことはできない。
- (18) ネチャーエフ・グループに属する А. К. Кзунетцовойの弁護士であったスパソヴィチは、「私は『カテキズム』がバクーニンによって書かれたものと断じて構わないと思う」と述べている(В. Д. Спасович, *Сочинения*, том V, стр. 149—150, Конфиёно, 前掲書の引用による)。
- (19) А. レーニクと М. Конфиёноは、いずれもスパソヴィチの主張を論拠に乏しいとしている(A. Lehning(éd.), *op.cit.*, vol. IV, p. LX; M. Confino, *op. cit.*, p. 48; M. Confino, *Bakunin et Nečaeв*, «Cahiers du Monde russe et soviétique» vol. VII, 4, p. 617)。
- (20) 例えばネットラウやチェルケーゾフがそうで、バクーニンからネチャーエフを引離そうとする傾向が共通している。ただしネットラウはサージンの証言によって自説をひるがえしたと言われる(M. Nettlau, *Bakunin. Eine Biographie*, London, 1896—1900; В. Черкезов (ред.), *М. А. Бакунин. Избранные сочинения. том I, предисловие*, М., 1920 を参照)。
- (21) 代表的なソ連のステュクロフをはじめ、バクーニン説を採る者が多い(Ю. М. Стеклов, *указ. соч.*, т. III を参照)。
- (22) 現代のソ連史家に多く見受けられる立場で、ネチャーエフとレーニン主義の継承関係を否定するところに力点が置かれ、『カテキズム』の著者については共著説、バクーニン説など、必ずしも一定していない(例えば共著説としては、カリャーキ

- ンとプリマクの前掲論文)。
- (23) この年に、テル・アヴィヴ大学教授の M. コンフィーノがバクーニンに関する書簡類をパリの Bibliothèque nationale で発見し、翌年にかけて《Cahiers du monde russe et soviétique》(以下 C. M. R. S. と略記) に発表した。
- (24) これらの書簡の中で、とりわけ1870年6月2日付でネチャーエフに宛てたバクーニンのものは、『カテキズム』の著者をネチャーエフと考えるうえにきわめて有力な手掛りを提供している。
- (25) バクーニン説を採る代表的なものを列挙すれば、次のとおりである。1) K. Marx, F. Engels, op. cit., Bde 18 und 33. 2) М. П. Драгоманов, указ. соч. 3) А. Тун, История революционных движений в России, Петербург, 1920. 4) А. И. Успенская, указ. соч. 5) Б. П. Козьмин, П. Н. Ткачев и революционное движение 1860-х годов, М., 1922. 6) М. П. Сажин, указ. соч. 7) Ю. М. Стеклов, указ. соч. 8) H. Iswolsky, op. cit. 9) E. H. Carr, op. cit. 10) Benoît-R. Hépner, Bakounine et le Panslavisme révolutionnaire, Paris, 1950. 11) Ш. М. Левин, Общественное движение в России в 60—70-е годы XIX века, М., 1958. 12) F. Mehring, Karl Marx. Geschichte seines Lebens, Berlin, 1960. 13) R. Canac, Netchaiev. Du Nihilisme au Terrorisme, Paris, 1961. 14) Max Nomad, op. cit.
- (26) ネチャーエフ説を採る論者は少ない。既に挙げたネットラウとチュルケーゾフを除けば、次のとおり。1) Вяч. Полонский, Краткая история жизни Михаила Бакунина (1814—76), М., 1924. 2) А. Гамбаров, указ. соч. 3) В. Ф. Антонов, указ. соч.
- (27) 共著説については、イニシアティヴはどちらにあったか、分担はどうであったかなど細かい点での解釈の差異は別として 1) A. Camus, L'Homme Révolté, Paris, 1951. 2) F. Venturi, Roots of Revolution, New York, 1960. 3) M. Prawdin, op. cit. 4) Н. Ю. Колпинский, В. А. Твардовская, Бакунин в русском и международном освободительном движении, «Вопросы истории», №. 10, М., 1964. 5) H. Arvon, Michel Bakounine ou la vie contre la science. Paris, 1960 などが挙げられよう。
- (28) C. M. R. S. vol. VII. 4, p. 624—699; Archives Bakounine, vol. IV, p. 103—134 に所収。なおフランス語訳はコンフィーノの前掲論文に併収され、Violence dans la Violence, p. 106—149 にも収められている。邦訳は、『バクーニン著作集』第5巻に見られる。
- (29) コンフィーノが依拠した個所を引用しておこう。「憶えていますか？ 私が貴君をアブレークと言ひ、貴君の教理問答書をアブレークの教理問答書と呼んだ時、貴君は腹を立てて言った。」(邦訳版341頁)。
- (30) コンフィーノは、確定的な結論を避けている。
- (31) C. M. R. S., op. cit., p. 620; Violence dans la Violence, p. 51.
- (32) Н. М. Пирумова, указ. соч.; David E. Apter and James Joll(ed.), Anarchism

- Today, London, 1971; A. Lehning (éd.), op. cit. Vol. IV; J. Barraué, op. cit. らが、相次いでネチャーエフ説を採りはじめている。
- (33) Н. М. Пирумова, Михаил Бакунин. Жизнь и деятельность, М., 1966, стр. 120.
- (34) ピルーモヴァはコンフィーノ論文の紹介を行なっている。Новое о Бакунине на страницах французского журнала, «История СССР», №. 4, М., 1968.
- (35) Н. М. Пирумова, М. Бакунин или С. Нечаев? «Прометей», №. 5, М., 1968; Бакунин, М., 1970.
- (36) Новое о Бакунине, там же, стр. 187.
- (37) ゲルツェン文書としてこれを保管していたナターリヤ・ゲルツェナは、死に際してゲルツェンの孫に当るシャルル・リストに渡し、同人を経てこれらの貴重な史料はパリの国立図書館に移管されたのであった。
- (38) А. Смирнов, За строгую научность, достоверность и историческую правду, «Коммунист», №. 16, М., 1972, стр. 117—118.
- (39) マルクスおよび当時のマルクス派を指す。
- (40) С. Н. Канев, Современная советская историческая литература об анархизме в России. «История СССР», №. 6, М., 1973, стр. 154—155.
- (41) С. Н. Канев, там же, стр. 155.
- (42) Н. М. Пирумова, Бакунин, стр. 301 を参照。
- (43) Н. М. Пирумова, Бакунин, стр. 290—291.
- (44) «Прометей», №. 2, М., 1968, стр. 178—180.
- (45) Ю. М. Стеклов, указ. т. III, стр. 466, 480.
- (46) A. Lehning (éd.), op. cit., vol. IV, LX.
- (47) Б. П. Козьмин, П. Н. Ткачев и революционное движение 1860-х годов, М., 1922 を参照。
- (48) Ю. М. Стеклов, указ. соч., стр. 425; Б. П. Козьмин, указ. соч., стр. 145.
- (49) С. Г. Сватиков, Студенческое движение 1869 года (Бакунин и Нечаев), исторический сборник «Наша страна», №. 1, СПб., 1907, стр. 187.
- (50) M. Confino, op. cit., p. 43; C. M. R. S., op. cit., p. 613.
- (51) 「革命家の自己自身に対する態度」, 「革命家の革命の同志に対する態度」(外川訳, 前掲書, 401—404頁)。
- (52) M. Confino, op. cit., p. 44; C. M. R. S., op. cit., p. 614.
- (53) コジミンは「兩綱領」のアナロジエを指摘しながらも、すでに述べたように、『カテキズム』の著者をバクーニンとしている(Б. П. Козьмин, указ. соч., стр. 90—98, 193—194)。
- (54) 例えば次がそうである。「Вопросы истории», №. 10, М., 1964, стр. 85; Franco Venturi, op. cit., p. 364.
- (55) E. H. Carr, op. cit., pp. 395—396.
- (56) Ю. М. Стеклов, указ. соч., стр. 474, 476.

- 67) «Красный архив», т. 4, М.-Л., 1923, стр. 229.
- 68) Ю. М. Стеклов, указ. соч., стр. 478.
- 69) Jean Barraué, *op. cit.*, p. 49.
- 60) М. П. Сажин, указ. соч., стр. 74.
- 61) Ю. М. Стеклов, указ. соч., стр. 479.
- 62) И. Б. Зильберман, Политическая теория анархизма М. А. Бакунина, Ленинград. 1969, стр. 54.
- 63) M. Confino, *op. cit.*, p. 39; C. M. R. S., *op. cit.*, p. 609.
- 64) A. Lehning éd., *op. cit.*, vol. IV, p. LXII.
- 65) «История СССР», №. 6, М., 1960, стр. 176.
- 66) В. Богучарский, Активное народничество семидесятых годов, М., 1912, стр. 151.
- 67) Б. П. Козьмин, История или фантастика, «Печать и революция», №. 6, М., 1926, стр. 107; Б. П. Козьмин, П. Н. Ткачев....., стр. 156.